
片思いジャンキー

あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

片思いジャンキー

【Nコード】

N8992A

【作者名】

あきら

【あらすじ】

両想いになった途端冷めてしまう片思いジャンキーのトモミが、世界最強の片思いを求めてドタバタ騒ぎの青春ラブコメディー（の予定）。

片思い（前書き）

初めて携帯からでも、サクッと読める小説を意識して書いてます。
本人コメディータッチは苦手なので、面白く書けるかどうか……。

片思い

「片思いジャンキー？」

「そうそう、私ね。片思いじゃないと気が済まないらしいの。両想いになった途端、もう次の片思いを探してるって感じ」

長い夏休みが終わり、冷房がないこの教室もだいぶ居心地がよくなった。

今時、大学の教室に冷房がないなんて、全国探してもここだけのような気がする。

今日最後の講義も終わって、みんなそれぞれ教室を出ていく中、私とミカはしっかり座り込んでおしゃべりを始めた。

二人とも部活やサークルにも入ってないし、バイトもしてない。放課後は暇で暇でしょうがない。

いつしか、こうやって講義が終わった後、二人でおしゃべりするのが日課になっていた。

「あー、分かる気がする。トモミっていつも付き合いだして一週間もたたずに別れちゃうしね」

ミカはやれやれといった顔で私を見る。

「なんかね、満たされないの。片思いの時のあのキューって苦しくなる感じ？ あれがないと生きてる気がしない」

「なんかさー、もっと恋愛以外に情熱を燃やすもの見つけたら？」

ミカはいつもこうやって私になにか部活かサークルに入るのを勧めてくる。今しかできないことってあるじゃない？ ミカの口癖の一つだ。

「んー、情熱を燃やすモノかあ……」

私は色々考えを巡らせる。しかし思い浮かぶのはやっぱり、

「やっぱり、片思いだよ。あれだけ自分の全てを燃烧できるものってなくない？ ミカは今彼氏がいるから分らないだろうけど……」

「彼氏がいたって、色々大変なんだよ。トモミはその辺経験する前

に別れちゃうじゃない？ もっと長続きする恋愛しなさいよ」

話をしながらミカは携帯を取り出し、何か見てる。

「よし、分かった。もっと長続きする片思いを見つかる。どうせ片思いジャンキーならさ、世界最強の片思いってやつを目指す！」

ガッツポーズをとりながら、私は世界に誓った。

「はいはい……私、彼氏から呼び出しかかったから、もう行くね。ジャーナー、がんばって世界最強の片思いでも見つけてね」

「えー、彼氏できてから付き合いわるー」

ぶーぶーと言う私を置いて、親友のミカが去っていく。女の友情なんてこんなもんか。やっぱり私を満たしてくれるのは、甘く切ない片思いだけ。

片思い（後書き）

読んでくれてありがとう。

ささ、次の話へお進み下さい。

両想い

片思いジャンキーの私だけど、今片思いしてない。

息が苦しい。やばい、欠乏症だ。

片思いプリーズ！！

どっかにいい男、落ちてないのか？ 私を恋のどん底にたたき落とすような、運命の男はドコ？

大学の帰り道、私は餓えたケモノのようなギラついた目をして歩いていた。

（五感をとぎすませ！ ありとあらゆる器官で、いい男を感じ取るんだ！！）

は！ 来た！！ この脳に差し込む感覚。

見よ、あの後ろ姿。歩き方といい、お尻の形といい、身長、服装、合格♪

さあて、後はそのご尊顔。

気配を消しながら、その男の横を通り過ぎ、そしてさりげなく！

そう、あたかも……。

あ、そういえば、忘れ物しちゃった、戻らないと、的な自然な振る舞いで、いざ！

振り返った瞬間、自分の五感の全てを呪った。

「あれ？ トモミじゃん」

慣れ慣れしく声をかけてきた、この男。先々代の片思い相手。

つきあい始めたものの、その飄々とした軽いノリが気に入らなくなり、三日で別れた。

私の中でも、最短記録を更新したのだが、なぜかその後も普通に話し合う仲。

「た・け・お・み~~~~」

恨みの長けをぶつける。ち、こいつ見た目だけはいいい男なんだよな。私もそれで騙された。いや、また騙された。私のイイオトコレ

「ダーなんてこんなもんか。」

「何だよ？ その恨みがましい目は？ 会った早々ご機嫌斜めだな。あ、もしかしてセーリ？」

このデリカシーのない男を殴り殺しても、情状酌量されるよね？

「私の貴重なエネルギーを返せ！ 今すぐ、耳を揃えて返せ！！」

「なんなんだよ？ わっけわかんねー」

タケオミは頭をぼりぼりかきながら、困惑していた。

それを見ていて気がついた。

「あ、タケオミ髪型変えたんだ。ややこしい事しやがって。だかか気づかなかったのか……いや、そうにきまつてる、じゃないと私のリーダーが……」

ぶつぶつ言っている私なんてお構いなしに、タケオミが

「暇だから、映画でもいかなー？」

とか言ってくる。

「はあ？ なんで私があんななかと……」

「一時期は両想いだった事もある仲なんだし、それぐらいつき合えよ」

ニッコリスマイル。これだ、このスマイルに騙された。何の悪意もないようなスマイル。

二度と同じ過ちは犯すまい。もうこの男にひっかき回されるのは勘弁。

「のーせんきゅー。私はあるほど暇じゃないんだって」

と言っているのに、むりやり手を引っ張って連れていかれた。

むきーーーー！！！！

両想い（後書き）

やっと書くテンションがつかめてきた。

このテンションキープするのむず！

続きを楽しみにして下さい。

たぶん、楽しくなるはず、いや、たぶんだから。

三つ巴

「んで、俺的には『バツ男』見たいんだけど？」

「んーパス。私は『SOBA』見たい」

結局、タケオミの強引な引っ張りに抵抗しきれずに、一緒に映画を観ることになった。

そういえば映画なんて一人で見に行けないし、ミカは彼氏出来てから付き合ってくれないし、もちろん彼氏なんていないし、まあいいか。

なんて自分に納得させることにした。

映画は良かった。長野にソバを食べに行きたくなった。

一人、余韻に浸っていると、タケオミが話しかけてくる。

「んあー、腹へった。なんか食べにいくかー？」

ウザイ。やっぱ一人で観に来た方が良かった。

「いや、いい。じゃねー、タケオミ」

私はタケオミを置いてさっさと家に帰る。

はずだったのに、なぜか！ なーぜーか！

タケオミとファミレスに入っていた。

「なぜだ？」

私は率直にタケオミに尋ねる。

「はあ？ 何？ それより何食べるよ？」

この強引さは何なんだろう？

「あんたは、なんでいつもそうなのさ？」

「俺、彼女とこのファミレスで待ち合わせしてる訳。んでトモミにはそれまで暇だから付き合っただけで、そういう訳だ」

は、はい？ それってなんかマズくない？ いやそれよりも……。

「ちよ、あんた。私の立場は？ アイデンティティーは？ 人権は？ 動物保護は？ 自然環境うんぬんは？ 政治的、経済的、イン

センチブは？」

「お前、何言ってるかワカランぞ」

とか言ってる間に、タケオミの彼女到着。

大学の中で何度か会ってるけど、なんか大人しそうで、清楚？
って感じで、一昔前の女の子ってイメージの人。

「あら、コンバンワ。トモミさん」

彼女が笑って挨拶してくれた。二人で居たことに何の疑問も疑惑もないのか？

「こ、コンバンワ、えっと……サキさん」

「何してたの？」

サキさんがタケオミに尋ねる。

「んー、トモミとデートしてた」

あっけらかんと答えるタケオミ。おーまーえーなー！

「違う、違う。ただお互い暇だったから、映画見に行っただけ……」

なんで私がこんなに慌ててフオーしてあげなきゃいけないんだろう。怒りの感情が渦巻いてくる。

「私、帰るから」

私はその場から去ろうとすると、

「お、またなー。俺、まだトモミが好きだから、また暇なときにでも付き合ってよ」

この男は、彼女がいる前でそういう冗談言うか？

私が硬直していると、彼女が、

「トモミさん、私からもお願いね。タケオミのこと」

とか真顔で言ってくる。こいつら……普通じゃない……。

「あ、え？ えーっと……」

私は言葉を探した。こんな時、なんて言えばいいかなんて分からない。
ない。

分からないから私は全力でこの場から走って逃げた。

三つ巴（後書き）

読んでくれてありがとう。

そして、次をお楽しみに。

感想頂けたら、がんばっちゃうぞー！

四面楚歌

「トモミさん、私からもお願いね。タケオミのこと」

私はなんでそんな事言ってしまったのだろう？

トモミさんは何か言いかけてから走って行ってしまった。

「ごめんな」

タケオミが私に謝る。さっきトモミさんと一緒だった時とは全くの別人のような真面目な顔で……。

「ううん。タケオミがトモミさんの事好きなのは本当だし」

タケオミと付き合い出したのだって、それを分かっている、それでもいいと、私が言い出したからだし。

「なんかなあ。お前ばかり大変な思いしてるよな」

本当のタケオミをトモミさんは知らない。でも私は知っている。

彼が本当は心に大きな傷を持っている事も……。今はそれでいいと思う。私もタケオミもお互い癒されてる。それでいい。

「タケオミってどうしてそうなのかしら？」

「そうって？」

「本当の自分を隠してまで好きな人の側にしようとする」

私はさっきまでトモミさんが座っていた椅子に座る。

「ん？ 誰だっけそうなんじゃない？」

「そうかな？」

私は、私の本当の姿で、全てを彼に知って欲しい。そう思うのは普通じゃないのかな？

「まあいいけど」

そして訪れる沈黙。タケオミは私と居るときだけは無口になる。それでもなにか通じ合っている気がするのだ。

私だって本当はタケオミが自分だけを見て欲しいと思う。

でもそれ以上にタケオミには自分が好きになった人と一緒になつて欲しいと思う。

三日間だけ訪れたタケオミの幸せ。それは本当に儚く終わってしまった。

終わってから彼は彼女だけを追いかけていた。

そんな姿が痛々しくて私は彼の側にいようと決めた。

でも、でも……。私の中の黒い部分がうごめき始める。

トモミさんの、彼女のどこがいいのだろう？

そこまで、彼が追いかけるまで好きになるのが分からない。

彼のことを全て理解したいけど、そこだけは分からない。

「サキ、あのさあ……。トモミのこと、悪く思ってるか？」

見透かされた。私が考える事なんて全部彼には分かっている。

「そんな事ないよ。タケオミが好きになった人だもの、私も好きよ」

嘘。大嫌いだ。本当はいなくなっただけ欲しい。でもそうになったら、

そうになったらタケオミはどうなってしまふんだろう？　それが怖かった。

「ん。そうか……」

タケオミはそう言っただけでまた何か考えている。何を考えてるのかな

？　トモミさんの事？

「そんじゃ、行くか」

彼はそう言っただけで、立ち上がる。

「今日はどこ行くの？」

「そっだなあ……。映画でも見に行くか。『SOBA』面白いらしい

よ」

四面楚歌（後書き）

読んでくれてありがとう。

今回の話はコメディから離れて

シリアスに……。

シリアス好きなんでちょっと作者の口直しに

間、間にこういうの挟んでいこうかなって……。

次からやっ和本題に入っていくよ、たぶん。

五月蠅い

私は、ついに、片思い欠乏症のために、一人寂しく部屋で野垂れ死んでいくのだった。

つてのは冗談にしても、あまりにも最近恋ができない。

こんなに長い間恋から離れたのは初めてだ。

一ヶ月もよく我慢できたな私。

よしよし、いいこ、いいこ。なでなで。

がはー、きめー、自分。

いや、でもよく考える。

世界最強の片思い目指すんだろ？

それってどういう片思い？

アイドルの追っかけ？ ストーカー？

んーどれもしつくり来ない。もっと全米が泣くぐらいの超大作、

超感動級のせつない恋だろ。

それってどんな恋？

ぐはぁー、わかんねー。あれだ。考えるんじゃない、感じるんだ。大体、恋ってやつあ、自分でしようと思っでできるもんじゃないし……。

ん？ なんか私の口調オヤジくさくね？

とにかくだ。

出会いの質、量共に不足してるんだ。このままじゃ、ほんとにヤバイって。

明日、ミカに相談してみよう。

「世界最強の片思いってどうしたらいいと思う？」

次の日早速ミカに聞いてみた。

「はぁ？ いきなり何よ。もしかして、昨日言ってた事、本気なわけ？」

「本気も本気。マジと書いて本気と読む」

「逆」

冷たい。ミカは最近私に冷たい。

「うわゝゝん。ミカは彼氏できてから私のことなんてどうでもよくなつたんだ。女の友情はドコに行っちゃったのよゝゝゝゝゝ」

大げさに泣いたフリしてミカに抱きついた。

「はいはい、どうどう。よしよし」

私はフリながら涙ぐんだ目でミカを見上げる。

ミカは優しい目で私を見ていた。

ミカが男だったらマジでこの時惚れた。

「ミカゝ。アイシテルゝゝ」

ミカに抱きつく力を倍増。

「ちょ、苦しいって……そうだねゝ。最強の片思いかぁ。相手が最強って言うんなら……」

「なにになに？」

「神様」

「かみさまー？」

「最強でしょ？ 修道院のシスターとか最強の片思いじゃない？」

「えー、うーん。確かに最強だ。よし、私出家する」

私はガッツポーズで世界に誓った。

「マジ？」

言い出したミカが啞然としていた。

「嘘にきまつてんじゃん。だいたい私神様とかあんまり興味ないんだよね」

「ほ、安心したよ。あんたのことだから、マジで変な新興宗教とかにはまりそうで怖いよ、わたしや」

「出会いの質量が足りないんだよ。絶対」

昨日出した結論。

「私の近くにいる男なんてさ」

私は教室を見渡す。

今は、実は講義中なのだ。

ろくなのがいない。少しましかなあと思う男も彼女つき。どうな
ってんだ？ いったいこの世の中は。

タケオミと目が合う。隣にはサキさんがいた。タケオミはニッコ
リ微笑み返す。

げ！ なんか気まずいんだよな！。

私は無視してまたミカの方を見る。

「だから、いつも言ってるようにさ、なんかサークルに入るとか、
そしたら行動の幅が広がって出逢いも多くなるじゃない」

「そ・れ・だ」

つい私は大声で答えてしまった。

「そこ五月蠅>>うるさくくい！」

講義をしていた教授に怒られてしまった。

五月蠅い（後書き）

読んでくれてありがとう。

一話の文字数1000文字前後に纏めようとするとなんて全然話が進まねー！。

このままじゃ、100話とかいくぞ、たぶん。

六面体

放課後。ミカと私は、どのサークルに入るか相談していた。

「やっぱイイオトコ比率が高そうなところに入らないとね」

私はやけにウキウキな気分だったのだが、ミカはそんな私を見て気難しそうに溜息をついていた。

「私としては、軽音とかテニスとかいいと思うんだけど、ミカは？ どうせならさ、二人で一緒のところにしろっよ」

「えー、私も巻き込むつもりなの？」

「だって、だって、やっぱり一人だけで知らない世界に足突っ込むのは怖いしさ。ミカが一緒ならなんでもできる気がするよ」

「何でもできるって……じゃあ、こうしよう。トモミと私で三つずつ希望のサークル書いて、サイコロで決めるってのは？」

「いいじゃん、それ。そうしょ。私は、じゃあさっき言った軽音とテニスと、そうだなああと一つ。サッカー部のマネージャーとか、とか」

ミカはノートを取りだして、メモをする。

1 軽音

2 テニス

3 マネージャー

そして、無言でその下に自分の希望を書いていく。

4 文芸

5 文芸

6 文芸

ちよ、ちよつとまでー！ー！。

「何それ！ ずっつ。三つ一緒だし！ しかもぶんげー？ 何それ、それ何？」

「えー、本とか読んだり、自分で書いたり」

「そりゃ、なんとなく分かるけど。そんなとこイイオトコなんてい

る訳ない！ 絶対ない！ ないないいいいい！！」

「なんかさあ、運動とか苦手だし、時間的に束縛されるのも嫌だし。てきとーに在籍してるだけで楽そうなところって言ったらさあ、それしか思い浮かばなかった」

文句ある？ って顔してるよ、ミカ……。

「いや、楽そうだけど、楽しそうではないよ。やめよう、そんな動機で入ったら失礼だし！」

私は必死になって説得した。

「動機って言ったらトモミの男目当てって動機もどうかと思うけどな！」

う。図星。

いや、ここで負けたら私の野望が、世界最強の片思いという野望が……。

「え、え、えっと、私は文章なんて書けないし、作文だって誉められた事なかったし、読書だって漫画読んだぐらいで、無理無理無理い！」

「さっき、私と一緒になら何でもできるって言ったよね？ よね？」

再び、ズボボ図星。

「そんな念を押して二回も聞かなくても、言いましたよ。言いまして、言ってます。うう。」

「まあまあ、要はサイコロ振って、自分が行きたいトコ出せば済む話なんだし」

「そうだ。それだ。よーし、私の全ての運をここに付きこむ！」

サイコロ出して！」

「いや、こんなんですべての運つき込んだら駄目でしょ。っと、サイコロなんてないよ。何か変わりになるものおっと……」

そう言って回りをキョロキョロ。鞆をゴソゴソ。

「よし、この鉛筆でいいや。投げる役はトモミに譲ってあげるよ。その意気込みに免じて」

マジックで数字を書き込む。その後私はそれを、うやうやしく受

け取る。

「よ。よおおっし！　いつくぞお」

私はその鉛筆を堅く握りしめ、そしてサイコロの神様、小堺さんに祈りを込める。

（なにがでるかな、なにがでるかな、なにがでるかな、チャチャチャチャン）

そして運命のサイは投げられた。

六面体（後書き）

The die is cast.

英語はてんで駄目駄目なんです、

なんかカッコイイんで覚えてる諺。

be + 過去分詞でゝされる、されてる

っていう受動態だっけ？

たぶん。

ためになる後書きだなあ（笑

七転び

小さな頃、双六なんかで私は小さな数ばかり出していた。友達が六でたー、とかはしゃいでる横で私は一や二ばかり。でも、思った。あのツブツブでグチャグチャな六なんて気持ち悪い。一はくりっとしていて、しかも赤色で、可愛い。私はサイコロの一が好きだった。六なんて嫌いだった。

今、私の前には『6』とマジックで書かれた面を上にして鉛筆が転がっている。

なんで、こんな時に限って……。

私はミ力を見る。

ニヤニヤしながら、

「はい、文芸サークルに決定っ」と

と鉛筆をしまおうと手を伸ばしている。

私はその手を掴み、

「待って！ 待って！ もう一回！ もう一回やり直し」

と懇願した。

「何回やったって、いや、どこのサークルだって同じだって。とりあえず入ってみて気に入らなかつたらやめたらいいじゃん」

ミ力はそう言って、私の手を振り払って鉛筆をしまった。

「いやああああああああ」

私の悲鳴は他に誰もいなくなった教室にむなしく響いた。

文芸サークルと一口に言っても、我が大学にはそれっぽいサークルが沢山あった。とりあえず案内板に張られたサークル仲間募集のポスターには四つあった。

「どれにしようか？」

どこも同じように見えるが、できればイイオトコがいてくれないと困る。ここは女の勘ってやつの出番ですかー？

「できれば女の子が他にもいたほうが安心だね。部室一個一個回って様子見るか」

ミカはいつだって冷静な判断を下す。私はミカに一生付いていきます！ と密かに誓っていた。

「よし、いつてみよー」

一個目。

扉を開けたとたん、男達がこっちを見る。

ひいー。今まで接したことがないような、暗そうな男が三人。

駄目、パス。

「間違いましたー」

二個目。

扉には力ギがかかっていた。パス。

三個目。

お、女じゃあー。ぐへへへ。いや、趣旨違うし。

とりあえず女の子が一人、男が二人いた。一個目に比べたら男の方でもましな方かな？ 感覚麻痺してきたか？

ミカと目を合わせ、お互い頷きあう。

「すいません、入部？ っていうのかな？ 希望なんですけど」

女の子がニツコリ笑って、

「あ、はい。今、部長いないんで、もうちょっと待って頂けますか？ すぐ来るはずですから」

と、私たちを部屋の中に促す。壁際にはでっかい本棚があつて、難しそうな本とたぶんこのサークルが出して来たであろう、薄い本がずらーっと並んでいた。

中心にある正方形のテーブルの周囲には椅子が六個。女の子は何か書いていたらしく、男二人はもうこっちには興味がなくなつたのか、それまで読んでいた本に目を移していた。

「私は原しずつて言います。文学部の三回生。よろしく」

おお。先輩だ。

「えつと私は薬学部2回生の法月トモミ、トモミって呼んで下さい。こっちは」

私はミカの方を指さす。

「私も薬学部2回生で、押尾ミカ。よろしく願いします」

「よかった。女の子が増えてくれたら私も嬉しいわ」

原先輩は、一個上なだけなのに、やけに大人っぽい人だった。綺麗だし。なんか優しいそうだし。とりあえず一安心だな。

「その男の子二人は、愛田君と飯野君」

「よろしく」

「よろしく」

原先輩に促されて、無愛想な挨拶をする二人組。

かぁー、駄目だ。もうこいつらアウトオブ眼中決定。

はぁ、他に部員がいなかったら、ここハズレだったなぁ。

そっぴいば部長がまだいるか。最後の希望。部長さんやーい。早く来ておくれー。

「暇だったら好きな読んでいて」

と、原先輩が本棚があるほうを手で指し示すが、はっきりいってどれが何の本なのかさっぱり。うがー、わけわかんねー。とりあえず、薄い本を手にとった。

「あ、それ去年のサークル誌。私が書いた話もあるから読んでみて」と、原先輩。うーん、そういうのって恥ずかしいのかな？

自分から読んでみてって自信がなかったら言えないよね。

目次で原先輩の名前を探して、そのページをめくってみる。

ミカが隣から覗き込んできた。

んー。今までまともに本読んだことないから上手いのかどうなのかすら分らない。でも出だしの話だけだと、ちょっと面白いかも。私は先輩の顔をうかがう。何かを一生懸命書いている。

やっぱ私は場違いなんじゃないだろうか？ めちゃくちゃ不安なんだけど……。

うーん。やっぱやめよっかなぁ。とか思っていると、背後にある

扉が開く音がした。

お、部長登場かあ？ まってましたー！

勢いよく振り返る私。

「あ」

「あ」

その人物と同時に声が出る。

「トモミさん？」

「サキさん……」

七転び（後書き）

いやー。

展開急ぎすぎて、予定の文字数大幅超え。

しかもぜんぜんコメディーじゃない。

俺にはコメディーの才能ないのかー！

笑いの神よ、降臨カモン！！

いや次から面白くなるよ、たぶん。

八起き

見つめ合う二人。そう言えば恋人同士の甘いヒトトキと思うかもしれない。実際は同性同士、しかも相手はなんか気まずい相手のサキさん。元彼のタケオミの今の彼女。お、なんかややこしい。

「トモミさんがなんでここに？」

「あ、えつと、サキさんは？」

質問を質問で返すのは失礼だと言われた事がある。えーつとあれは誰だったかな？

オカン？ いやお爺ちゃんだったか？ オヤジはありえねーし。小学校の先生だったか？

いやいや、そんな事はどーだっていい。

「私、このサークルの一員なのよ」

サキさんが答える。そ、そうなの？

「私たちもここに入ろうと思って」

横からミカが答える。一応、ミカとサキも同じ学科だから見知った仲なんだけど、それほど仲良しでもない。

そう聞いたとき、一瞬サキさんの顔が曇った。ように見えたけど、満面の笑顔で

「そう、嬉しい。ミカさん達って賑やかだから、きっと楽しくなるね」

と言った。んー？ 気のせい？ もしかして、迷惑だったりとするかな？

まあ、いいか。気にしない、気にしない。楽観が私のぼりしーだし。

「よっしゃ。これから楽しくやってこー」

私はガッツポーズでみんなに誓った。

「あ？ なんか賑やかだね、珍しく」

と言いながら、サキさんの後ろから背の高い男が現れた。

「部長、今日は遅いですね」

原先輩の声に私はがっぷり反応した。

部長、きたー！

この部室において、アウトオブ眼中ズ、以後略してアオ眼ズ、以外の男登場で、私のテンションは跳ね上がった。

いやだつて、これはイイオトコに入るよ。合格。

んー確かにぱつと見は地味かもしれない。町中で会っていても、きつと私のリーダーにはひっかからなかっただろう。でも、アオ眼ズによって私のイイオトコラインが引き下げられてる今なら、かなりイイオトコに見えるんだつて。

は！ 思いだした。工業高校に行った男友達の言葉。

『ブスしかない所に慣れると、大抵の女は超ド級の美人に見えてくる』

今、分かった！ これはオシム語録並の名言だよ。

部長は背が高く、優しそうで、メガネが似合っていて、とにかく、一目惚れした。

「あ、私、入部希望のトモミって言いますう。こっちはミカ。よろしく願いしま〜す」

ありったけの猫なで声でさっそくアピールタイム！

「そなの？ えっと、じゃあ後でこれに名前と学科と、連絡先書いておいて」

と、そっけない態度。

私の片思い魂に火がついた。

八起き（後書き）

今回、何度か書き直したよ。

前回長かったから、今回は短めにまとめようとしたら
これまた上手くいかない。

物語的にターニングポイントだし……。

んで、投稿が遅れた訳なんだけど

誰もそんな事気にしてないからOK♪らんらん♪

ストーリーの土台が書き終わり

主要キャラクターも勢揃い。

やっと物語のスタートラインに立てた感じです。

これから各キャラクターが勝手に動き回ってくれるはず！

いや、頼むからそうなってくれ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8992a/>

片思いジャンキー

2010年10月15日20時56分発行